

令和元年度学校評価結果				R1年度 前期(7月)					R1年度 後期(12月)											
アンケート項目番号	重点目標	評価の観点	(A評価を記載)	担当	3者アンケート結果			結果の考察	判定	評価員評価	今後の取組	3者アンケート結果			結果の考察	判定	評価員評価	今後の取組		
					評価者	A	B					A+B	評価者	A					B	A+B
教① 児6 児7	授業 (主体的・対話的な授業)	「三角ロジック」を意識した話し合いを指導している 相手に伝える声で話したり、自分の考えと比べて相手の考えを聞いていますか。 自分の考えをわかりやすく伝えていきますか。(三角で伝えようとしていますか。)	「三角ロジック」を意識して話す児童の割合(85%以上) 1-① できている⑥ できている⑦	研究 神村	教師	20.0	60.0	80.0	児童自身は「比べながら聞く」「わかりやすく伝える」とを意識していることとらえていたが、教師が期待する姿に到達している児童は少ない。 教師も指導を意識しているか自己評価を行う。	B	A 61.4 A+B 92.4	「三角で伝えよう」「聞き名人になろう」にモデルを示し、教師はモデルとなる姿を見せる。また、モデルのような話し聞かされたかという視点で、2週間に1回自己評価を行う。教師も指導を意識しているか自己評価を行う。	教師	60.0	40.0	100.0	高い意識をもち指導に当たった結果、児童の意識も高まったと言える。一方で、C、D評価をしている児童が一定数おり、固定化が懸念される。	A	A 54.6 A+B 86.2	考えを述べる際に、解釈や根拠を添えて話すことに苦手意識のある児童には、現在できていることを認めながら、自信を高め、底上げを図る。ホワイトボードなどのツールを用いることで、考えを可視化し、話しやすくなるよう支援する。
					児童	54.3	34.3	88.6					児童	60.0	25.7	85.7				
					児童	45.7	42.9	88.6					児童	45.7	40.0	85.7				
					平均	40.0	45.7	85.7					平均	55.2	35.2	90.5				
教② 保3 児10	授業 (深い学びへの工夫)	深い学びにつながる「★思考を深める発問」を設定している。 学校は、分かる授業づくりを行っている。 授業はわかりやすいですか。	授業の中で設定している(80%以上) 1-② できている③ できている④	研究 神村	教師	100.0	0.0	100.0	教師は高い意識をもち、深めの発問を設定している。また保護者は、わかる授業をしていると感じている。	A	A	考えを発表した後に、深めの発問を投げかける。4教科と道徳で取り組んでいく。また深い学びを得るため必要感のある場面とらえ、または作り出し、授業の中で対話を取り入れるようにする。	教師	83.3	0.0	83.3	深めの発問の設定頻度は下がったが、深めの発問を取り入れ、対話によって深めたい指導をする意識は高まっている。(セルフチェック結果参考)	B	B	問題解決型の課題を意識することで、深めの発問の質を高め、深い学びを得られるようにする。
					保護者	60.0	34.3	94.3					保護者	58.8	38.2	97.0				
					児童	65.7	31.4	97.1					児童	67.6	14.7	82.3				
					平均	75.2	21.9	97.1					平均	69.9	17.6	87.5				
教③ 保5	基礎学力の確実な定着	タイムマネジメントを意識し、キーワードを用いて児童自身の言葉でまとめや振り返りを行う。 学校は、計算や漢字等、基礎基本の定着を図るために授業の工夫を行っている。	児童自身がまとめや振り返り(適用問題)を行った授業(90%以上) 1-③ できている⑤	研究 神村	教師	20.0	60.0	80.0	児童自身の言葉でまとめを書く時間を生み出すためのタイムマネジメントに課題がある。保護者評価の高さは、昨年度から取り組んでいる分野が定着していることも関係があると思われる。	B	B	各教科における深めの発問や、道徳科における中心発問を開始する目安の時間(深めの発問まで20分、中心発問まで15分)を意識し、タイムマネジメントを意識した授業をする。	教師	16.7	66.7	83.4	タイムマネジメントを意識し時間を確保し、児童がまとめや振り返りを行う取組は全体的に定着している。漢字の日の設定、並列線、放線後学習などの取組が、保護者の満足度を高めたとと思われる。	A	A	児童自身の言葉で、まとめや振り返りを書く取組を継続する。また、自身が書いたものを読み返し、推敲する習慣を身に付けさせることで、基礎基本の確実な定着を目指す。
					保護者	60.0	34.3	94.3					保護者	60.0	37.1	97.1				
					児童	40.0	47.2	87.2					児童	38.4	51.9	90.3				
					平均	40.0	47.2	87.2					平均	38.4	51.9	90.3				
教④ 保7 保10 児8	学習規律の徹底	ベル学で45分の授業時間を確保している。 学校は、子どもたちに正しい姿勢、話す・聞く態度など学習規律の指導を行っている。 学校は、食育や歯磨きなど、健康についての指導を行っている。 正しい姿勢で学習していますか。	確保している 1-④ できている⑦ できている⑧	研究 保健 英	教師	83.3	16.7	100.0	職員の評価に対して児童、保護者の評価がやや低い。児童の姿勢についての自己評価が低いことや学習規律の指導が保護者からして不十分であることが原因と考えられる。	A	A	授業時間をはじめ、その他様々な場面で学習規律や姿勢について指導する。また、手本となるような児童を積極的に認めたり、発音測定時に学級で姿勢について指導したりして、学習規律や姿勢についての意識を高める。	教師	57.1	42.9	100.0	保護者評価は高くなったが、児童の自己評価は低くなった。姿勢について指導する場を設けたり、給食中に声をかけたりして意識を高まった。しかし、意識はできても実践できていないと思われる。	A	A	引き続き、授業時間を始め、様々な場面で学習規律や姿勢について指導する。特に、できている姿を積極的に認め、自発的に意識したり、実践するように促す。
					保護者	54.3	34.3	88.6					保護者	42.9	48.6	91.5				
					保護者	65.7	25.7	91.4					保護者	65.7	34.3	100.0				
					児童	25.7	57.1	82.8					児童	31.4	45.7	77.1				
平均	57.3	33.5	90.7	平均	49.3	42.9	92.2													
教⑤ 保4 児9	考えを書かせる指導	授業中に児童が考えを書く指導をしている。 学校は、考えを書く指導を行っている。 自分の考えをノートに書いていますか。	している 1-⑤ できている④ できている⑥	研究 神村	教師	100.0	0.0	100.0	学習課題に対する自分の考えや、まとめを書く時間を設定し、個人思考の場として大切にできたことが、児童、保護者のA+B評価90%以上につながった。しかし、主述関係の整わない文を書く児童が見られるなど、書く力が高まっているとは言いがたい。	A	A	個人思考をノートに書く時間を設ける取組を継続する。個人思考を書かせる指導の実施後に、教師は振り返りをする。1時間を選び週末に振り返りを書く。振り返りは、①児童の達成度②効果のあった指導③改善点等とし、取り組んでいく。	教師	80.0	20.0	100.0	個人思考を書かせる指導の実施後に、週末に振り返りを書く。振り返りのポイントは①児童の達成度②効果のあった指導③改善点とする。研究主任は、月末に週末を見せたい。②効果のあった指導について、職員会議で紹介する。	A	A	個人思考を書かせる指導の実施後に、週末に振り返りを書く。振り返りのポイントは①児童の達成度②効果のあった指導③改善点とする。研究主任は、月末に週末を見せたい。②効果のあった指導について、職員会議で紹介する。
					保護者	65.7	28.6	94.3					保護者	60.0	31.4	91.4				
					児童	74.3	25.7	97.2					児童	82.4	17.6	97.2				
					平均	80.0	18.1	97.2					平均	74.1	23.0	95.7				
教1-⑥ 保6 保2-1 児1 児2	家庭学習の習慣化	自学も含め、学年や個人に応じた(内容・時間)家庭学習の指導をしている。 学校は、児童が家庭で勉強する習慣が身につくよう指導している。 お父さんは家庭学習に取り組んでいる。 宿題を忘れずにしていますか。 家で学年×10分程度(1年生は20分)の学習をしていますか。	している 1-⑥ できている⑥ できている2-① できている⑦ できている⑧	研究 神村	教師	100.0	0.0	100.0	学年に応じた時間、家庭学習に取り組むことが定着しているといえる。しかし、漢字練習ノートや自主学習ノートの成果物を見ると、質の差が見受けられる。丁寧さが足りないものや、間違いを最後まで直していないものなどがあり、その差が理解度の差につながっていると思われる。	A	A	教師は、学年や個人に応じた家庭学習の指導を行う。ノートに書き書きを行い評価をしたり、手本となるような家庭学習を行った児童の成果物を掲示したり、家庭学習の手引きを用いた確認を定期的に行う。また、指導が意識できていたかを毎月1回セルフチェックシートで振り返る。	教師	60.0	40.0	100.0	教師による自学ノート等への書き書きや、夕食前に宿題を終える指導に対し、保護者は高い評価をしていると思われる。家庭学習の時間は確実に確保できている。しかし、進んで家庭学習に取り組むようになっていない児童が数名見受けられる。	A	A	夕食前に、家庭学習を終える指導を継続する。また家庭学習の効果は、メディアに触れる時間を制限したり、読書時間を増やしたりすることで、一層高まることを児童に周知し、児童自身が家庭学習に前向きに取り組めるようにする。
					保護者	48.6	42.9	91.5					保護者	51.4	48.6	100.0				
					保護者	51.4	31.4	82.8					保護者	48.6	34.3	82.9				
					児童	60.0	25.7	85.7					児童	67.6	29.4	97.0				
平均	67.4	24.0	91.4	平均	61.5	32.7	94.3													
教1-⑦ 児11	外国語活動の充実	7/7日による学習課題の設定及び振り返りを授業の中でやっている。 外国語活動では、習った英語を使って進んでコミュニケーションをとろうとしていますか。	90%以上の授業で行った 1-⑦ できている⑩	外国語 登美	教師	100.0	0.0	100.0	複式授業で行っているが、ALTの方々の連携を行い授業形態や流れが確立してきた。一つの学年に大型テレビが与えられているので、課題に沿ったDVDを使用したアクティビティを取り入れられているので、振り返りもしっかりと出来ている。	A	A	引き続き課題を設定し、振り返りまで行う。そのために、ALTとの連携をさらに密にし、タイムマネジメントを意識して取り組んでいく。	教師	40.0	20.0	60.0	教師・児童とも低くなっている。特に教師の評価が大幅減である。理由は外国語活動が各学年どのように行われているのかの共通理解ができていないためと思われる。児童においても進んでコミュニケーションをとろうという活動内容が薄かったのかかもしれない。	C	C	教師間の外国語活動に対する共通理解を深める。そのためには日常的な情報交換だけでなく、3学期に指導主事を招聘し、校内研究会を設け、指導を受ける。 ・来年度は教科書も変わり新しい教育課程となるので、作成時に、児童のコミュニケーション能力を高める活動を位置付けことを意識する。
					児童	60.0	28.6	88.6					児童	57.1	22.9	80.0				
					平均	80.0	14.3	94.3					平均	48.6	21.5	70.0				

教⑦ 児14	ICTの活用	タブレットやパソコン、大型テレビなどICT機器を活用している。	積極的に活用している(週2回以上) 1-③	情報	教師	25.0	75.0	100.0	児童が積極的にICT機器を活用していると感じているのに対して、教師は授業内で積極的に活用する(週に2回以上)には至っていない。	A	調べ活動や新聞作りの際には、積極的にパソコンを利用する。大型テレビを活用し教材を映すことで、授業に取り入れていく。	教師	0.0	50.0	50.0	児童の多くはICT機器を使った授業が分かり易いと感じている。道徳発表もあり、ICT機器の利用した授業づくりまでは考える時間が取れなかったと考える。	D	週に2回、週案にICT機器の利用をした授業を記入し、意識づけを図っていく。(どの機器をどのように利用したか)パソコンや大型テレビだけではなく、デジタルカメラなどの利用でも記入することができる。
		タブレットやパソコン、大型テレビで授業をするのがわかりやすいですか。	できている④	児童	77.1	14.3	91.4	児童		80.0		8.6	88.6					
平均			51.1	44.7	95.7	平均			40.0	29.3	69.3							
教2-① 保14	道徳科の授業の充実	思考ツールを工夫した対話的な話し合いの場を設定する。	月3回以上は取り入れている 2-①	道徳	教師	80.0	20.0	100.0	これまで学級ごとに発行していた道徳だよりを、学級向けと全校向けの2種類ずつ発行したことで、道徳授業の様子やわかると感じている保護者の数は昨年度より増えた。道徳授業が楽しみと感じている児童の割合は7割程度で、自分の考えを話すことが好きだという児童も7割にとどまる。	A	自分の考えを話すことに抵抗感のある児童の意識改革を図る。話すことに抵抗感のある児童は、他者の考えを受け入れることにも抵抗感があるという調査結果があった。「聞き名人になろう」に記した「スタンバイ」を意識できるよう指導する。児童はスタンバイができたかという視点で2週間に1回、自己評価を行う。	教師	66.7	0.0	66.7	「聞き名人になろう」に記した「スタンバイ」を意識している児童は9割を超えた。児童は対話的な学習を楽しみ、前向きに取り組むようになった。道徳だより全校版を発行した。保護者の思いを受け止め、更に他の保護者に発信する取組がA+B評価100%につながった。	B	「三角で伝えよう」聞き名人になろう」にモデルを示し、モデルのような話し方を指導する。今後も指導を継続する。思考ツールの活用により、考えを話すことに苦手意識のある児童も話せるようになることを目指す。様々な思考ツールを紹介し、授業での活用を促す。
		学校は道徳授業の様子を保護者に伝えている。	できている④	保護者	62.9	34.3	97.2	保護者		65.7		34.3	100.0					
平均			71.5	27.2	98.6	平均			66.2	17.2	83.4	A+B 62.4 A+B 96.2		A+B 47.2 A+B 89.4				
教2-② 保9 保2-2 保2-5 児4 児5	基本的な生活習慣の確立	宿題を始める時刻を指導している。	いろいろな場面で指導している 2-②	保健	教師	100.0	0.0	100.0	児童の睡眠時間の確保に取り組めていない保護者が多いが、学校への取組の評価は高い。児童は約9割ができていますと自己評価した。また、メディアのルールについて児童の自己評価は高いが、保護者からの評価は、低い。保護者から見て約束を守れていない児童が多いと考えられる。	B	睡眠やメディアについて保護者の意識を高めるため、保護者も対象にした学校保護委員会を実施したり、メディアとの付き合い方について専門家から話を聞く機会を設けたりする。また、気になる児童には、宿題やメディアのルール確認や、帰宅後の過ごし方について具体的に取り組むことを決め、保護者と共有する。	教師	50.0	33.3	83.3	保護者の睡眠に関する評価は高くなった。一方で、メディアに関する評価に変化はなかった。児童は睡眠・メディアの両方とも評価が低下した。メディアのルールを確立していない家庭も多く、睡眠時間の確保にも影響していると考えられる。	C	3学期の情報モラル教室や気になる児童は個別で、メディアとの付き合い方を指導する。また、睡眠時間の確保やメディアとの付き合い方は、家庭での時間になるため、保護者にも合わせて指導することが必要である。そのため、指導内容や、取組を保護者にも発信して共有する。
		学校は、児童が早寝により睡眠時間の確保ができるための取組を行っている。	できている④	保護者	51.4	40.0	91.4	保護者		60.0		34.3	94.3					
平均			51.9	28.6	80.5	平均			41.4	37.1	78.6	A		A				
教2-③ 保8 保2-4 児12	あいさつの習慣化	まず教師が元気な挨拶を率先し、先あいさつをするよう指導している。	いろいろな場面で指導している 2-③	生指	教師	100.0	0.0	100.0	学校でのあいさつはとても素晴らしいものがあるが、家庭では自分から進んできかんとしあひさつができていないと思われる。児童は学校であいさつがしっかりとできていることを実感していると思うので評価が高いと思われる。	A	学校でのあいさつを家庭や地域に広めていく活動を行い、児童の挨拶に対する意識を高めていく。また、家庭では大人の方から挨拶をしていくことも啓発していく。	教師	57.1	42.9	100.0	前期に引き続き学校でのよい挨拶は継続されていると思うが、家庭での挨拶が保護者から見ればまだまだという感じである。	A	今後、学校・家庭・地域どこでも同じような挨拶ができるように意識を高めていく。生活目標で学校での挨拶に目を向ける取組が多いが、これらの取り組みを家庭や地域まで広げよう内容を変えていく。
		学校は、心を伝えるあいさつができる子になるよう取り組んでいる。	できている④	保護者	65.7	25.7	91.4	保護者		60.0		37.1	97.1					
平均			75.7	17.9	93.6	平均			63.6	29.3	92.9	A		A				
教2-④ 保11 児13	いじめ等への対応	授業の中で、どの子にもよさを認める、ぬくもりのある指導をしている。	どの子の良さも認める指導をしている 2-④	生指	教師	75.0	25.0	100.0	いじめに対する取り組みは未然予防を中心に行われており、小さなトラブルも対応することができている。	A	なんでも相談を継続し、小さな悩みも相談にのる教師側の姿勢を今後も示し、児童が安心して学校生活を送れるようにしていく。保護者には学校便りなどを利用し、学校の取組を紹介していく。	教師	71.4	28.6	100.0	結果に大きな変動はないが、何でも相談や学校アンケートなどから気になる児童の相談が後期にいくつかあった。	A	定期的なアンケートは今後も継続し児童の悩みを聞いていく。また、自分の困っていることはもちろん、友達に困っていることなども、気軽に相談してほしいということを何でも相談を行う時に話していく。
		学校は、いじめや児童の問題などに、適切に指導・対応している。	できている④	保護者	52.9	44.1	97.0	保護者		54.3		40.0	94.3					
平均			70.3	25.9	96.2	平均			65.7	30.5	96.2	A		A				
教2-⑤ 保12	心の教育	ねらいを明確にして、充実した交流活動を行っている。	行っている 2-⑤	生指	教師	80.0	20.0	100.0	なかよしグループや集団登校などで学年を越えた縦のつながりができている。高学年は低学年の面倒をみたり、教えたりしようという姿勢が身についている。	A	これまで受け継がれてきている上級生と下級生のつながりを、日頃の活動や行事などを通して伝えていく。その活動を上級生、下級生のそれぞれのめあてで評価していく。なかよしグループや集団登校などで学年を越えた縦のつながりができている。高学年は低学年の面倒をみたり、教えたりしようという姿勢が身についている。	教師	71.4	14.3	85.7	前期に比べ教師評価が落ちている。交流活動自体があまりなかったからか、めあてが明確でなかったか。	A	活動に対しては、どんなねらいで行うかを明確にし、児童にめあてをもって取り組めるようにする。さらに、振り返りまでしっかりと行いどんな力がついたのかを実感できるようにしていく。
		学校は、地域の伝統や文化を大切に、児童の豊かな心を育成するための取組を行っている。	できている④	保護者	71.4	25.7	97.1	保護者		68.6		31.4	100.0					
平均			75.7	22.9	98.6	平均			70.0	22.9	92.9	A		A				
教⑥	異学年交流	なかよし班活動を通して、児童の思いやりある心を育てている。	なかよし班活動に進んで参加しており、児童の心も育っている 2-⑥	特活	教師	60.0	40.0	100.0	教師は、なかよしグループでの活動の際に高学年を中心に思いやりを持ちまとまって行動できていると感じている。	A	中学年以下の児童が、下級生に対して異学年交流の際に積極的に関わり合い、手助けやアドバイスをしようという意識が希薄である。そこで、運動会練習をいかして積極的に下級生に関わり合うよう教師側も意識して声掛けをする。また、高学年児童には声のかけ方を下級生に教えることをさせる。	教師	66.7	33.3	100.0	なかよし班活動は問題なく行うことができた。しかし、中学年が運動会練習の中で下級生と関わり合う場面を設定することが難しかった。そのため、中学年児童の意識向上につなげることができなかった。	A	6年生を送る会のプレゼント作りや合唱練習にて4年児童が中心となって進める場面を設定する。また、それを受けて5・6年児童は4年生の良かったところ認めたり、アドバイスをするようにしたりする。
		なかよし班活動を通して、児童の思いやりある心を育てている。	できている④	児童	60.0	40.0	100.0	児童		66.7		33.3	100.0					
平均			60.0	40.0	100.0	平均			66.7	33.3	100.0	A		A				

教⑦ 保2-3 児3	読書活動の推進	図書館利用計画に基づく活用を行っている。 お子さんは親子読書、週末読書など家庭での読書に取り組んでいる。 家庭で読書（親子読書、週末読書）をしていますか。	90%以上は活用している2-⑦ できている2-③ できている③	読書 登美	教師 保護者 児童 平均	40.0 34.3 74.3 49.5	60.0 42.9 17.1 40.0	100.0 77.2 91.4 89.5	昨年年度末と比べると、保護者のA評価が12パーセント増え、AB評価が高くなった。週末読書だけではなく、週3回の平日読書の声かけが、家庭にでも表れてきていると思われる。	B	図書館利用計画の活用をしやすいように、各教室の読む読むボックスに各月に利用する本を準備する。また、毎週火曜日の掃除時間を、読む読むボックスの読書時間とし、時間の確保をする。	教師 保護者 児童 平均	40.0 34.3 74.3 49.5	60.0 42.9 8.6 37.2	100.0 77.2 82.9 86.7	評価が高くなった前回とほとんど数字が変わっていないが、児童のB評価が低くなっている。児童の貸出冊数から読書量の二極化が見られようになったことに原因があると思われる。	B	校内の読書活動に対する取組は少しずつではあるが効果が出てきているので継続する。 個人差については、個人貸出冊数をタイムリーに知らせ意識を高めていく。	
教⑧ 児15	体力の向上	1校1プランを意識した運動（上体起こし、反復横跳び等）を授業等で取り組んでいる。 進んで体を動かしていますか。	週2回以上取り組んでいる2-⑧ できている⑯	体育 本山	教師 児童 平均	75.0 62.9 69.0	25.0 22.9 24.0	100.0 85.8 92.9	週に最低でも1回は、1校1プランを意識した運動を行っている。また、児童のほとんどが進んで体を動かすことができる。	A	授業の導入には、積極的に1校1プランを意識した運動を取り入れる。また、上体起こしや時間走だけでなく、柔軟体操等にも取り組んでいく。体育委員会主催で長休みの時間を利用して、スポチャレに取り組んでいく。	教師 児童 平均	40.0 57.1 48.6	40.0 28.6 34.3	80.0 85.7 82.9	高学年の体を動かす頻度が比較的に少ない。授業の導入で必ずではないが、1校1プランを意識した運動を行うことができる。	B	「外遊びデー」や「レッツピョンピョン」への参加を体育委員会中心に促す。特に高学年への声掛けをする。「外遊びデー」は内容に偏りが出ないようにし、季節に応じて場所や内容を考える。	
教9	自然とのふれあい	担任による「しぜんふれあいタイム」等の積極的な活用。	学級で月2回以上の活用をしている2-⑩	教務 登美	教師 平均	50.0 50.0	50.0 50.0	100.0 100.0	今年度から始まった、運動のほそタイムの時間を確保するために、月に2回の実施が難しくなりました。また、天候にも恵まれなかったことも原因である。	A	今後の月行事予定を見てみると、やはり月2回の実施は難しいと考えられる。その分、理科や生活科・総合の時間の積極的な活用を声かけする必要がある。	教師 平均	0.0 0.0	80.0 80.0	80.0 80.0	評価が下がったのは、月に一度になった「自然ふれあいタイム」は実施できたが、授業内での学習で利用できていなかったためと思われる。	B	森の中にベンチが設置されるなど環境がよくなった。来年度の自然ふれあいタイムは月一度にし、毎週の外遊びデーなどで委員会活動でも利用できるようにする。	
教1 保2	3 家庭・地域と連携した信頼される学校づくり	地域に開かれた教育課程	保護者や地域人材を日常的な授業や行事、体験活動などで活用している。 学校は、保護者と連携・協力した学校づくりを行っている。	計画に従い活用している（90%以上）3-① できている②	教頭	教師 保護者 平均	50.0 45.7 47.9	50.0 45.7 47.9	100.0 91.4 95.7	音楽会の演奏に、地域の伝統文化であるでんでん太鼓を取り入れ、地域の人の協力を得て、練習、発表を行った。また、学校園や花壇の整備、昼休みのサポート等でも地域人材の手を借りて振替計画通り活用することができた。	A A+B	66.9 97.6	16.7 54.3 35.5	66.7 91.4 79.1	66.7 91.4 79.1	公開研究会のゲストティーチャーに地域人材を活用したクラスもあったが、全校的な取組は2学期に行われておらず、評価が下がったものと思われる。	C A+B	62.3 91.1	3学期は、六年生を送る会の音楽指導や授業参観でのコンサートなど、全校的な地域人材の活用が予定されている。こうした取組を今後も続けて、地域に開かれた教育課程を推進していきたい。
教2 保1		保護者・地域との連携	ホームページや通信、連絡帳を通して学校の様子を知らせている。 学校は、教育活動の様子をわかりやすく保護者に伝えている。	知らせている3-② できている①	校長	教師 保護者 平均	100.0 60.0 80.0	0.0 34.3 97.2	100.0 94.3 97.2	学校からは月1回の学校便り、学年便りと連絡だよりと毎日のHPで学校教育の様子を伝えている。また、発達段階に応じて、担任職量で適宜学級便りを発行している。	A	教育活動の様子は、引き続き同様の形で発信していく。学校の様子を知らせるために、今後は授業参観後の懇談会の持ち方について検討していく。	教師 保護者 平均	83.3 68.6 76.0	16.7 25.7 97.2	100.0 94.3 97.2	HPで引き続き、毎日の教育活動をお伝えしていく。	A	今後ともHPで学校や学習活動の様子を知らせていく。月1回の学年便り、担任の思いを盛り込んでいく。
教3 保13 保2-6		危機管理	危機管理意識を持って児童への指導を行い、週案にも記載している。 学校は、避難訓練や交通安全指導など、安全管理への対応が取られている。 お子さんは安全に登校し、不審者や事故から身を守ろう気をつけている。	常に週案にも記載している3-③ できている⑬ できている2-⑥	教務 登美	教師 保護者 保護者 平均	100.0 68.6 50.0 72.9	0.0 31.4 50.0 27.1	100.0 100.0 100.0 100.0	週案の記入は100%であり、書き込むことで危機管理は高まってきている。	A	今後も引き続き、週案に記入していく。また、緊急の場合は、生徒指導がランチルームで全校に話すことで、指導に漏れがないので、これも引き続き行っていく。	教師 保護者 保護者 平均	66.7 77.1 45.7 63.2	33.3 22.9 45.7 34.0	100.0 100.0 91.4 97.1	引き続き、週案の記入は100%であり、書き込むことで危機管理の維持がされている。	A	今後も引き続き、週案に記入していく。また、前同様、緊急の場合は、生徒指導がランチルームで全校に話すことで、指導に漏れがないので、これも引き続き行っていく。
教4-1	な4 学校運営 PDCAサイクルを意図した、組織的	取り組みの改善	PDCAサイクルを意識して取組を提案し、改善している。 提案、改善の取り組みをしている4-①	教務 登美	教師 平均	83.3 83.3	16.7 16.7	100.0 100.0	昨年年度末と同じ数値である。	A A+B	77.4 85.7	16.7 16.7	100.0 100.0	100.0 100.0	前回と同じ数値であった。	A A+B	79.2 93.8	今後は、スムーズに来年度に移行できるように、来年度につなげることを意識した振り返りを引き続き行っていく。	
教4-2	働き方	勤務時間を意識した効率的な働き方をしている。 1カ月の時間外勤務時間の平均が60時間以下4-②	1カ月の時間外勤務時間の平均が60時間以下4-②	教頭	教師 平均	71.4 71.4	0.0 0.0	71.4 71.4	概ね、時間外勤務時間が60時間以下の職員が多いが、個人差が大きい。小規模校で、仕事の量に比して職員の数が少ないため、一人当たりの業務量や作業時間が多くなる傾向がある。	C A	75.0 75.0	12.5 12.5	87.5 87.5	87.5 87.5	職員意識改革を進めるとともに、業務の全体量を減らし、業務の効率化、省力化を進めていく。また、引き続き、定時退庁日、ノー残業デーの実動、校務支援システムや地域人材の活用、研修会の持ち方等を工夫していききたい。また、持ち帰り残業がなくなるよう、努力していききたい。	B A			